

赤十字NEWS 12

Japanese Red Cross Society NEWS

DECEMBER.2024.#1015

12月は「NHK海外たすけあい」キャンペーン

特集 | ▶ P.2

終わりの見えない紛争 20億人の命と尊厳を守る



©Ukrainian Red Cross Society

TOPICS

日本赤十字社名誉副総裁
三笠宮妃百合子殿下 ご逝去
..... P.4-5

連載

万博と赤十字 P.4
献血ハートフルストーリー P.5

AREA NEWS

[福井] 医療への興味を広げよう
初めて触る医療機器にドキドキ
[京都] 「命を救える人を増やしたい」
高校生の救急法指導員、誕生
[愛媛] 地元動物園とコラボ
親子で防災を学ぼう! / 他 P.6-7

WORLD NEWS

イスラエル・ガザ人道危機から1年
ガザ派遣医師が高校生に伝える、現地の“今”
..... P.8

PRESENT!!

『象印マホービン
やきやきホットプレート』

プレゼント!
5名様

詳しくは
P.7をCheck! ▶



SPECIAL FEATURE

特集

終わりの見えない紛争 20億人の命と尊厳を守る

世界で紛争の影響を受けている人は約20億人*1いるといわれています。戦闘地域にいる人だけでなく、紛争によって貧困や食料危機に見舞われている人、教育や医療を受けづらくなった人など、世界の人口の4分の1にあたる人が紛争による苦しみを抱えています。今回の特集では、紛争地での赤十字活動を報告するとともに、紛争下における国際ルール「国際人道法」にもフォーカスを当て、その意義を改めて考えます。

*1:2023年1月、国連発表

🌍 ガザでの活動



負傷者を搬送するパレスチナ赤新月社
©PRCS

武力衝突が激化して以降、ガザ地区では多くの一般市民が犠牲となり、家を追われ、食料や水、薬などが常に不足している状況が続いています。赤十字では、救急搬送や「こころのケア」の提供、生活必需品の配布を行う他、今年5月にはパレスチナ赤新月社と赤十字国際委員会(ICRC)の連携のもと、南部ラファに野外病院を開設し、患者の受け入れをはじめました。

パレスチナ赤新月社職員の声

私はこれまでもガザ地区での紛争を乗り越えてきましたが、今回の紛争が一番激しく、長期化しています。大切な同僚もこの紛争で失いました。強い喪失感に襲われ、病院の閉鎖、医薬品や医療スタッフの不足といったさまざまな問題に直面しながらも、私たちは昼夜問わず負傷者を搬送し、救命活動を続けています。



パレスチナ赤新月社
救急救命士
ジハッド・マンスーさん

🌍 イスラエルでの活動



負傷者を搬送するイスラエル・ダビデの赤盾社
©MDA

イスラエルでは、攻撃が続く中、今もなお人質の多くが解放されておらず、家族は不安と悲しみを抱えています。赤十字は、人質解放に向けて尽力し、引き渡し支援を行っています。また、イスラエル・ダビデの赤盾社*2は、救急車で負傷者搬送や輸血用血液の確保などの活動を行っています。

*2:イスラエルの赤十字社の名称

ダビデの赤盾社職員の声

10月7日に武力衝突が激化してすぐ、緊急事態体制となり、私は社に駆け付けました。私には娘が2人いて、私が出動準備をするのを不安そうに見ていましたが、彼女たちも、私の仕事を理解してくれています。多くの人が友人や同僚を失った今、この国で紛争の影響を受けていない人はいません。早く安心して暮らせる日が来ることを願いながら、命を救う任務に引き続き携わっていきます。



イスラエル・ダビデの赤盾社
マネージャー
オリアンヌ・ルカッツさん

🌍 レバノンでの活動



レバノン赤十字社の救急車出動の様子

レバノンでは、周辺国の武力衝突が波及し、国内情勢が刻々と変化しており、これまでに3200人以上の死者、1万4000人以上の負傷者が報告されています。また、国内外への避難者も130万人を超えました。日赤では、レバノン赤十字社・パレスチナ赤新月社レバノン支部を通して、現地の医療を支援する活動を展開しています。

(2024年11月 国連発表)

現地の日赤職員の声

最前線で活動するボランティアや医療従事者たちは、自らも被災者であり避難民でありながら、壊れた建物から負傷者を救い出し手当てをしています。これまで日赤ではレバノンの病院で多数傷病者対応の訓練を行ってきましたが、今まさに、その知識が役立っていると、現地の赤十字スタッフたちは話しています。



日赤中東地域代表部 副代表
あおやま す み か
青山 寿美香さん

「国際人道法」と赤十字

ジュネーブ条約の誕生と赤十字の成り立ち

赤十字の創始者 アンリー・デュナンは以下の2つの提案をし、それが各国の赤十字社の誕生と、ジュネーブ条約誕生につながりました。

1859年

ソルフェリーノの戦い

イタリア統一戦争(仏伊VSオーストリア)

1862年

アンリー・デュナン:「ソルフェリーノの思い出」出版

1863年

赤十字国際委員会の前身「5人委員会」発足

提案1

戦場で負傷した兵士を敵・味方の区別なく救護するために、平和なときから各国に救護団体を組織しておく。

提案2

救護団体が、戦場で安全に活動できるように国際的な取り決めを結ぶ。

1864年

各国赤十字社の誕生

ジュネーブ条約の誕生(国際人道法)

武力紛争時に守られるべきルール

国際人道法では、戦場という究極の状況下でも、その影響下にある人々を人道的に保護するために、「犠牲者の保護のルール」や「戦闘方法・兵器を規制するルール」が定められています。詳しくは、右記の二次元コードからご覧ください。



ICRC作成の動画「戦時の決まりごと」の「人道的な待遇の保障」シーンから。



紛争の最前線にいる人々の苦しみを軽減し、 人間の尊厳を守るためのルール、それが国際人道法



赤十字国際委員会(ICRC) 駐日代表部
法律顧問
にしやま しゅうへい
西山 秀平さん

国際人道法は、武力紛争下で「やってはいけないこと」、つまり、制限・禁止される戦闘方法や手段と、民間人や捕虜などの武力紛争の犠牲者と病院や学校などの民衆の保護を定める複数の条約の総称です。赤十字の成り立ちと国際人道法の誕生は同じ理念に基づいています。ICRCは、武力紛争の犠牲者を保護するため、いかなる状況下でも中立・独立・公平の原則を貫き、紛争解決や和平交渉等の政治的介入は決して行いません。この原則のおかげで、政府や軍だけでなく、世界中に450以上存在する「人道上の注意を必要とする」武装集団のうち3分の2以上と対話できるのです。平時からICRCは、人道法の守護者として、当事者と守秘義務に則って対話を継続します。そのなかで、人道法上の義務を再認識してもらい、遵守に

よって生み出される平和への道筋や普遍的価値を伝えます。信頼関係によって、紛争時に武装勢力の支配下で暮らす人々のような、最も支援を必要とする人々にも寄り添うことができます。イスラエル・ガザの人道危機でも、当事者双方の人道法の遵守が、一部の人員と被拘束者解放につながりました。昨今の紛争では、人道法違反のみが注目を集めますが、人道法があるからこそ守られる命や尊厳があることも、多くの人に知ってほしいです。それは例えば、離散家族の追跡調査や、収容所訪問を通じて達成されます。世界で人道危機が広がる中、日本においても決して無関係でなく、一人一人が人道法の重要性に目を向けるべき時が来ています。ICRC駐日代表部は、日赤と共に日本国内での国際人道法の普及に貢献したいと考えます。



「NHK海外たすけあい」

キャンペーン期間 12/1(日)~12/25(水)

「NHK海外たすけあい」キャンペーンとは?

日本赤十字社とNHKが毎年12月に実施する募金キャンペーン。集められた寄付は、世界各地で紛争、災害、病気などにより苦しんでいる人々を支援する活動に役立てられます。1983年から2023年までに、世界170の国と地域に支援を届けました。



「SAVE365Magazine」特設サイトで寄付も受け付け中

特設サイト「SAVE365Magazine」では、12月25日まで「海外たすけあい」に関するコンテンツを配信中。海外たすけあいで寄せられた寄付をもとに実施した支援を受けた方々と支援を行った赤十字職員の声を紹介した「海外たすけあいPOST」などを掲載。ぜひご覧ください。



詳しくは
コチラ



「SAVE365Magazine」特設サイトでは、昨年の「たすけあい」寄付によって救われた方々の声を多数紹介しています

赤十字の支援を受けられた方々の声

ウクライナ

夫婦で人里離れた村に住んでいて、医師を呼ぶための携帯電話もありません。赤十字が巡回診療を始めてくれたおかげで、定期的な診療を受けることができ感謝しています。



イヴァノフ
フランキウス州
ズノヴィイさん

アフガニスタン

支援を受けるまで、子どもの服や生活必需品を買うこともままならず、生活は大変でした。支援のおかげで仕事道具も調達でき、裁縫教室を開設。生活も安定しました。



ヘラート州
バハドゥリ・サレハさん

バングラデシュ

地域保健ボランティアが各家庭を回って、健康面でのアドバイスをくれます。私も持病があることを相談し、状態が良くないときには赤十字の診療所を紹介してくれました。



バングラデシュ南部
避難民キャンプ
ソモダさん

TOPICS

日本赤十字社名誉副総裁
三笠宮妃百合子殿下 ご逝去

毎日新聞社提供

ご生涯にわたり、
赤十字に深くお心を寄せられ
活動を支えてくださった妃殿下日本赤十字社名誉副総裁をお務めになる
三笠宮妃百合子殿下が、11月15日、東京都
中央区の聖路加国際病院にて亡くなられました。皇室最高齢となる101歳でした。なお、
葬儀(斂葬の儀)は11月26日、東京・文京区
の豊島岡墓地にて行われました。三笠宮妃殿下は、昭和天皇の末弟で上皇
陛下の叔父にあたる三笠宮崇仁殿下と1941
(昭和16)年にご結婚され、1953(昭和28)
年3月に開かれた日赤の第1回代議員会で、
秩父宮妃殿下、高松宮同妃両殿下、三笠宮殿
下とともに名誉副総裁に推戴されました。
全国赤十字大会や地方赤十字大会、献血運
動推進全国大会へのご臨席に加え、災害救
護演習の視察、裁縫奉仕活動、募金活動
を含むさまざまなチャリティー活動、赤十字病
院へのご訪問など、71年にわたり名誉副総
裁として日赤の活動を支えられました。また、
妃殿下のご長女の甬子さんが日赤の近衛忠輝
名誉社長の夫人というご縁もありました。

ここに謹んで哀悼の誠を捧げます。

1954(昭和29)年5月
東京都の浜離宮庭園
で行われた災害救護
演習をご視察。三笠宮
殿下(手前左の黒い
スーツの方)と妃殿下
(右)①1970(昭和45)年5月
大森赤十字病院をご訪
問され、患者にすずらん
の花を贈られる②1971(昭和46)年4月
日赤本社で裁縫奉仕を
される(奥右から1人目)。
裁縫奉仕は災害救護用
の乳児肌着などをミシン
で製作する活動で、名誉
副総裁の各妃殿下が積極
的に参加された1970(昭和45)年11月
赤十字大会にご臨席(右から
1人目)。赤十字大会は赤十
字の活動に功績があった
方々を称えるために開催さ
れる。本写真は名誉総裁(当
時の皇后陛下)が有功章を授
与されているところ1971(昭和46)年7月
石川県金沢市で開催された第7回献血運動推進全国大会
にご臨席(中央)1991(平成3)年6月
第33回フローレンス・ナインゲール記章授与式にて(中央)。
同章はスイス・ジュネーブに本部がある赤十字国際委員会が、
顕著な功績のあった世界の看護師などに対して授与するものvol.
3

万博と赤十字

2025年4月に開幕する大阪・関西万博には、
赤十字の理念を伝える「国際赤十字
・赤新月運動」のパビリオンも出展され
ます。本連載では万博と赤十字の150年
以上にわたる関係をひもときます。

©Expo 2025

2005年愛知万博「愛・地球博」開催 赤十字パビリオンはなぜ人々の心をつかんだのか

「愛・地球博」の赤十字パビリオンを出展する
上で日赤職員たちが向き合ったのは「赤十字と
は何か」という、存在の本質を掘り下げる「問い」
でした。スイス・ジュネーブの国際赤十字・赤新月
博物館にある赤十字の思想を伝える展示などに
触発されながら議論を重ね、「今の赤十字」を伝
えるコンテンツを練り上げていきました。パビリ
オンでは、赤十字の歴史や、世界中で多くの人
に降り掛かっている脅威と不安を「知り」、そこ
に寄り添って支える赤十字の思いを「感じ」、訪
れた人が自分ゴトとして「考える」の3つのゾ
ーンを展開。特に、戦争や飢饉、自然災害など
の厳しい現実の中で生きる人々と、その人々を
支援する赤十字の活動を映像で伝える「マイン
ド・シアター」や、来場者が感じたことを書い
て掲示する「こころの掲示板」は、多くの人の
思いを共有する場となりました。ロコミで来館者が日
を追うごとに増え、最終日は6時
間待ちの行列が。来館者が、熱い
思いに突き動かされ、自らペン
を取って思いをつづる姿は、「**自分
にできること**」を考えるきっかけ
をつくるというこの展示が目指
した“成果”を示すものでした。また、赤十字のボランティアが、
案内や誘導係といったパビリ
オンの運営の中心を担ったのも
大きな特徴でした。連日、全力で運
営に励んだボランティアからは「お互いを思いやり、助け合うことの大切さ、
赤十字の素晴らしさを改めて実感した」「参加
したことを誇りに思う。地域に戻って、ますます赤十字の理念を広げる活動を頑張りたい」とい
った声が聞かれ、日頃から赤十字に携わる人々
にとっても、深く記憶に刻まれるものとなりま
した。みなさんから寄せられた
たくさんのメッセージ

献血ハートフルストーリー

vol.12

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、
ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、
日々どのような思いで血液事業に取り組んでい
るのかを紹介していきます。

教師を目指した私がみつけた「やりがい」



今月のひと

profile
静岡県
赤十字血液センター
学術情報・供給課
さかしだ りょうた
坂下 凌太さん私は、輸血用血液製剤の安全な配送、県内
における医療機関の在庫や使用状況の管理とい
った業務に携わっています。初めて献血に関わ
ったのは高校3年生のときでした。高校時代に「**で
きることは何でもやってみよう**」という精神でさ
まざまなボランティア活動に挑戦し、東日本大
震災の復興支援やペットボトルキャップをワクチンに変える活動などをしていました。その一環
で献血したのですが、回数を重ねるごとに献血
を身近に感じ、大学に入学後は、愛知県献血学
生連盟という献血を啓発する組織で積極的に活
動するようになりました。大学進学時の「将来の夢」は高校教師になる
こと。もともと私は、自分の本当にやりたいこと
が分からず、そんな自分を変えたいという思いか
らボランティア活動を始めました。その方向に導
いてくれた高校の恩師の存在や、そこでの経験
から、将来は**高校生たちに自分の経験を伝え、
彼らの成長をサポートしたい**と考えたのです。
しかし、大学時代の献血啓発の活動の中で、当
時の日赤でも学生職員の熱心さに触れ、**献血に関
わる仕事でも学生の気持ちに寄り添うことができ、
血液事業の意義を伝えていくことも教育の一環
になる**という思いに至りました。新規採用で東海北陸ブロック血液センターに
配属された3年間は、学生ボランティアと連携し
た活動を推進する業務にも携わり、日赤側の立
場になって初めて、担当職員は学生の主体性を
尊重しながら、裏では調整を重ねてサポートし
ていたのだと理解しました。現在は学生と関わる
業務ではなくなりましたが、今も**「命に関わる責
任ある仕事」というやりがい**を持って仕事に臨む
中で、学生をサポートし、同じ思いを持った
仲間が増えていると実感できた当時の経験は、
良い糧になったと感じています。血液製剤の
配送準備中



医療への興味を広げよう 初めて触る医療機器にドキドキ



10月6日、福井赤十字病院は福井市主催の健康フェアに参加し、医療機器の体験ブースを出展。血圧計、酸素飽和度測定器、聴診器、包帯の4種類の体験を用意し、親子連れなど約100人が来訪しました。子どもたち向けに病院職員が制作した紙芝居で機器の特徴を説明してから、いざ体験。子どもたちは家族や自分の胸に聴診器を

当て、「心臓の音が聞こえるよ!」と驚いた様子で耳をすませたり、酸素飽和度測定器で血中の酸素量をチェックしたり、と大はしゃぎ。中には「将来は看護師さんに!」と、目を輝かせる子も。医療に対する興味や健康への関心を高める機会となりました。



地元動物園とコラボ 親子で防災を学ぼう!



日赤愛媛県支部では、10月13日の「国際防災デー」に、愛媛県立とべ動物園にて啓発イベントを開催。ファミリー層を対象に、南海トラフ地震などの大規模災害への備えとして、バーチャルの映像技術を用いた地震・津波体験や、避難所で使用する段ボールベッドの組み立て、災害時トイレの実演などを行いました。また、日赤職員や学生ボランティアが、子ども用のイラスト教材で災害時の危険を説明するなど、親子で楽しみながら学べる機会となりました。参加者からは「VRによる臨場感のある体験ができて、災害の危機意識が高まった」「災害に備え防災食を購入したい」などの感想が寄せられました。



熊本地震から8年 「ぼうさいこくたい 2024 in 熊本」開催



10月19日、20日に、熊本市内3会場で日本最大級の防災イベント「ぼうさいこくたい2024 in 熊本」が開催され、日赤もAED体験や特殊医療救護車両の展示を行いました。今年は2016年熊本地震から8年。「復興への希望を、熊本から全国へ」をテーマに、県内外から防災に関わる400超の団体が参加。イベント主催組織である防災推進国民会議の清家篤議長(日本赤十字社社長)もオープニングであいさつし「教訓は学ぶだけでなく、実践してはじめて意味を持つ」と体験型イベントの意義を語りました。秋晴れとなった2日目は多くの来場者があり、用意した風船もあったという間になくなるほど盛況となりました。



各地の赤十字ボランティアが能登半島の被災地で活動 「支え合う活動が、エネルギーに変わる」



今年1月の地震に続き、9月の豪雨災害で大きな被害を受けた能登半島で、赤十字ボランティアによる被災者の支援活動が行われました。

10月19日、福井県赤十字救護奉仕団など6人が、輪島市の避難所(河原田公民館)で、足湯や癒やしのハンドケアを実施。同奉仕団は、救急法指導員などの資格を有する方々で編成され、日頃から防災訓練への参加や災害時の救護物資搬送等の支援を行っています。当日は、避難されている方19人が参加され、「からだが楽になりました」「遠いところから来て

いただきありがたいです」などの声が聞かれました。(①)

10月26日には、石川県能登町の柳田地区仮設住宅の集会所において、日本赤十字豊田看護大学の教職員4人がボランティアとしてリラックスサロンを実施し、リラックス体操、ハンドケア、お茶会等を行いました。仮設住宅では、なじみのあるコミュニティから離れて孤立感を感じる方がいるといった課題がある中、今回の活動は憩いの場となるだけでなく、仮設住宅におけるコミュニティ形成の一助となりました。(②)



救護員基礎研修会を経て 大規模訓練に参加



日赤香川県支部では、9月19日、10月11日の2日間、「支部・施設合同救護員基礎研修会」を開催し、59人が参加。救護員としての役割や活動の流れを理解し、災害時の初動対応についてのグループワークでトリアージや避難所アセスメントなどを学んだ他、被災地に派遣された想定で救護活動の具体的な流れを身につけました。(①)

研修を経て、10月16日、香川県石油コンビナート総合防災訓練に香川県支部救護班が参加。南海トラフ地震を想定し、「香川県石油

コンビナート等防災計画」に基づき、救護所の設置や坂出市消防本部と協力して負傷者の応急処置を行うなど、災害発生直後の対応について確認、参加した。防災関係機関14団体との連携を深めました。(②)

また、10月27日には「香川県総合防災訓練」に参加。南海トラフ地震を想定し、50団体が連携強化を図りました。香川県支部はテント型の野外病院dERUを設営、傷病者の受け入れを行い、レスキューサポートバイク赤十字奉仕団による医薬品の輸送や、アマチュア無線奉仕団による無線交信など、総勢55人の奉仕団の方々と職員14人が、災害時の役割や行動を確認しました。(③)

常任理事会開催報告

令和6年11月22日、令和6年度第7回の常任理事会が開催されました。
今回の常任理事会では、理事会報告事項(令和6年度上半期事業報告)、赤十字病院のグループ経営の推進について、それぞれ報告しました。

理事会開催報告

令和6年11月22日、令和6年度第2回の理事会が開催されました。
今回の理事会では、令和6年度上半期事業報告、令和6年度上半期における災害救護活動、2025年大阪・関西万博への赤十字の出席、令和6年度NHK海外たすけあい、社長が決定した補正予算について、それぞれ報告しました。



「命を救える人を増やしたい」 高校生の救急法指導員、誕生



日赤京都府支部に高校生の救急法指導員が誕生しました。18歳の中村亮祐さんは、以前火災の現場に遭遇した際に、現場から救出された人に救急隊員が胸骨圧迫を行う姿に衝撃を受け、さらに、その人が命を取り留めたこと知り、「自分も災害現場の最前線で人の命を救う仕事がしたい」と救急救命士を目指すように。万の際に救急車を待つだけでなく、心肺蘇生や応急手当をすることの大切さを多くの人に広めたいと、赤十字救急法指導員養成講習を受け、学科試験と実技検定に合格。10月27日の救急法講習で、指導員デビューを果たしました。

どうすれば指導員になれるの?
日赤WEBサイト



「人道人間クロスレッド」 講習普及の最新話を配信



日赤大分県支部が、赤十字講習普及のための一環として制作している動画「人道人間クロスレッド」。最新作として第4話「大魔王の怪しき陰謀! 子どもたちの未来を救え!!〈乳児の異物除去編〉」がYouTubeで公開されました。「人道人間クロスレッド」とは、悪と戦い、敵・味方の区別なく苦しむ人々を救いながら講習普及を目指す謎のヒーローです。今回は、悪によって邪魔された幼児安全法講習を人道人間クロスレッドが救うストーリーとなっています。公開中の過去3話と併せて、ぜひお楽しみください(二次元コードから視聴可能)。

PRESENT!!

“日赤トリビアクイズ”に答えてプレゼントを当てよう!

5名様に当たる!

Quiz

Q.

1867年のパリ万博会場を訪れた、日本赤十字社の創設者・佐野常民ら一行はどんな格好をしていた? 次のどれ?

A. ちょんまげ帯刀姿

I. ゆかた姿

U. スーツ姿

ヒントは右の二次元コードから▶▶▶

プレゼント

象印マホービン
やきやきホットプレート

焼く、煮るなど料理のレパートリーが広がる3枚のプレートがついたホットプレート。深さ3.5cmの「深型プレート」はパスタや焼き、パエリアなどのこぼれやすい料理にも対応。「傾斜溝つきプレート」はお肉の余分な脂を溝に落としヘルシーに焼き上げ、「区切り線」つきたこ焼きプレートは直径43mmの大きなたこ焼きが30個焼けます。家族で楽しめるこれからの季節にぴったりな商品です。

本体サイズ:幅48cm×奥行33cm×高さ14cm(3枚重ね時高さ18cm)

プレゼント応募方法

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。

① お名前 ② 郵便番号・ご住所 ③ 電話番号 ④ 年齢 ⑤ 赤十字NEWS12月号を手にした場所(例/献血ルーム) ⑥ クイズの回答 ⑦ 12月号読者アンケートの回答

(※ご応募いただいた個人情報にはプレゼントの発送および弊社からのお知らせに利用いたします)

(※12月号読者アンケート)質問項目

[A] 日赤の「会員」ですか
ア. 会員(年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く) イ. 会員ではない

[B] 赤十字について知っている活動はどれですか(※下記選択からAークの文字をご記載ください。複数選択可)
ア. 国内災害救護 イ. 国際活動 ウ. 赤十字病院 エ. 看護師等の教育 オ. 献血(血液事業) カ. 救急法等の講習 キ. 青少年赤十字 ク. 赤十字ボランティア ケ. 社会福祉

[C] 今月号の赤十字NEWSをお読みになって、以前よりも赤十字活動全体についての理解が深まりましたか
ア. とても理解が深まった イ. ある程度理解が深まった ウ. すこし理解が深まった エ. 以前と変わらない

[D] 興味・関心を持った記事・企画はどれですか
ア. 特集 イ. TOPICS ウ. 万博と赤十字
エ. 献血ハートフルストーリー オ. エリアニュース
カ. プレゼント キ. ワールドニュース

[E] 赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま イ. A4サイズ ウ. 小冊子(A5 148×210mm)サイズ

[F] 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 イ. 2か月に1回 ウ. 3か月に1回 エ. 半年に1回

[G] 赤十字NEWSの記事をスマートフォンやパソコン(オンライン)で読みたいですか、いままでもお読みですか
ア. オンライン イ. どちらかというとオンライン
ウ. (オンラインと紙の)両方 エ. 紙 オ. どちらかというと紙

[H] その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望(任意)

郵送/〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS
12月号プレゼント係
WEB応募/下の二次元コードからご応募ください。
12月31日(火) 必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代させていただきます

ご応募は
こちらから



イスラエルとガザ地区ってどんなところ？

イスラエルは、地中海に面しており、ヨルダン、レバノン、エジプトなどと国境を接している。ガザ地区は、西を地中海、南をエジプトに接する地域で、日本の種子島ほどの総面積に人口約210万人が住む。パレスチナ被占領地の一部であるガザ地区は2007年にイスラエルが地区を取り囲む壁を建設したことで包囲され、物資運搬と人の往來の厳しい制限を受けている。



イスラエル・ガザ人道危機から1年

ガザ派遣医師が高校生に伝える、現地の“今”

昨年10月にイスラエルとガザ地区の武力衝突が激化してから1年。双方合わせて犠牲者は4万4000人を超え*、人道状況は悪化の一途をたどっています。赤十字国際委員会(ICRC)と日本赤十字社は、ガザでの医療支援から戻ってきた外科・整形外科医の安藤恒平さんと高校生によるトークイベントを開催。高校生たちは安藤医師が伝えるガザ地区の状況に真剣に耳を傾け、次々と質問を投げかけました。

*2024年11月5日現在、国連人道問題調整事務所



現地病院の多くが機能不全に ICRCが野外病院を設置

武力衝突激化から1年がたった今でも、イスラエルで拉致された人質の問題は解決せず、ガザ地区では市民が戦闘の犠牲になり、収束の兆しが見えません。医療システムの崩壊も深刻で、ICRCは今年5月に、パレスチナ赤新月社との連携のもと、ガザ南部のラファに**赤十字野外病院を開設**しました。**現在この病院は、日赤を含む12の各国赤十字が協力して運営**を行っています。

10月4日、埼玉県の青少年赤十字加盟校、さいたま市立浦和南高等学校において、トークイベント「高校生と考える“イスラエル・ガザ”の1年」が開催され、安藤恒平医師が現地の状況や病院での業務について語り、高校生からの質問に答えました。安藤医師は、昨年の12月以降3度ガザ入りし、4度目となる今年8月には、赤十字野外病院で活動しました。

「前回までは、もともと現地にあった病院で医療支援を行っていました。しかしそこも、攻撃による強い振動で天井が落ちてしまっているような状況。敷地内の看護学校で寝泊まりをしていましたが、教室の窓ガラスが割れて危険なので、教室と教室の間にある狭い廊下に布団を敷いて寝ていました。今回活動を行った野外病院は、海の近くで、比較的安全とされているエリアにあります。敷地内に病棟、手術室、献血室、薬局なども揃っているほか、食堂や休憩所なども設置されていました」(安藤医師)

病院に運ばれてくる患者は、ほとんどが攻撃

によりけがをした人々だったと言います。

「患者さんからは、『何かが体を通り抜けて行った』という言葉がよく聞かれました。爆撃によって飛んできた何らかの破片なのか、あるいは弾丸なのか…。大きな骨折をしたり、内臓が傷ついてしまったりと、さまざまな傷を抱えた人々の治療を行いました」と安藤医師。訪れる人の多くは、体だけではなく、心にも大きな傷を抱えていたとも語ります。

「**家族を全員失って、自分だけが生き残ってしまった6歳の男の子**が入院していました。本人も複数箇所の骨折と外傷を負っていましたが、**心を閉ざして、まったく話をしてくれませんでした**」(安藤医師)

野外病院には、心に傷を抱える患者をサポートするためのメンタルヘルスのテントも設置されています。家族を失った人だけではなく、体の一部を切除しなくてはならない重症の人もいて、そうした人々への「こころのケア」を行うために欠かせない場所となっています。



私たちが目を向けるべきことは？ 参加高校生からも多くの問いかけが

トークイベントに参加した生徒たちからは次々と安藤医師へ質問が投げかけられました。ある生徒の「患者さんと接する上で心がけていたことはなんですか?」という問いかけには、安藤医師はこう答えます。

「『何が起ったの?』と、患者さんの背景を探るような質問をしないことです。これは、最初の派遣で現地の医師に教わったこと。

患者さんだけでなく、病院スタッフにも家族を失った人が数多くいるので、同僚にもその質問はしません。心の傷口に触れることなく、仕事をまっとうするよう努めていました」

また、「命の危険を感じたことはありましたか?」という質問に対しては、危機に瀕した状況が分かるこんな回答が。

「現地の病院で活動していたときは、突然お腹に響くほどの爆音が聞こえて、しばらくすると黒煙が上がることもありました。そんなときは、身の危険を感じるというよりも『音が聞こえたということは、生きているんだ』と考えるようになりました。本当に危機的な状況下では、危険を感じる間もなく、一瞬で吹き飛ばされるからです。そんな状況でも、赤十字の一員であることで、私たちは守られていました。**レッドクロスのマークを空に向けて掲げている以上、私たちが攻撃を受けることはあってはなりません。それが戦時のルールです**」(安藤医師)

安藤医師の言葉の一つ一つを重く受け止めた生徒たち。最後に代表して感想を述べた伊藤いちごさんは、「一つの施設で献血や薬の管理、精神的サポートまで完結する野外病院の設備のすごさを感じました。赤十字のマークによって保護され、攻撃を受けてはならないことも初めて知りました。今回学んだことを周りの人に伝えて、ガザの状況を多くの人に認知してもらい、支援につなげたいです」と語りました。

イベントの様子は[こちらから](#)▶



野外病院の全景。
日赤も手術室とリハビリテーション資機材を寄贈



「ニュースを見たとき、もうひとごとだと思わず、しっかりと受け止めたい」と感想を語る生徒も



「また現地に行って活動し、見てきたことや経験を持ち帰り、日本で伝えていきたい」と語る安藤医師